

詩歌・小説の中のはきもの (第28回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

270 私は靴に関しては、ほとんどあきらめていたところがあった。草履や下駄がぴったり似合う、幅の広い足。

「そういう足は、丈夫でとってもいいのよ」

と年配の人に誉められたりしたが、ファッション的には最悪であった。私は思春期のころから、靴を履いて足が痛いのは、生まれつきの足の形が悪いからだと思っていた。

群ようこ

★『かつら・スカーフ・半ズボン』から。タレントのなべおさみは、足が大きかったので、「大人になったら大きくなるよ」とよく言われ、その気になっていたという。そんな俗信が確かにあった。私は今でも漁師のいかつい手を見たりすると、思わず「いい手をしてますねえ」とほめてしまう。幅広の足も骨太の手も、労働という観念がその基本にあって、「働き者」を感じさせるのである。日本の靴会社も外国の靴に負けないよう企業努力したから、作者は「今は商品が豊富で・・・私はすこぶる機嫌がいい」と書いている。

271 ほとんど一生のあいだ履き続けてきた青銅のサンダルが、いまや彼の歩みを重くするのだった。このサンダルは類をみないすばらしいものだった。使い古されることも、裂けることもなく、水に浸けても縮まず、埃にまみれても、岩角にあたってもいたまない。しかし履く者にとっては過酷なサンダルだった。重く、カタカタと音がする。石のように不細工で、折りたたむこともできない。曲がら

ず、丸みがなく、足の動きに従わない。足の方が、サンダルに合わせなければならなかった。履いていて疲れるし、いつも怪我を心配していなければならない。

ロジェ＝ポール・ドロワ他

★『ギリシア・ローマの奇人たち (中山元訳)』から。紀元前四三五年のことと伝えられる。エンペドクレスは、老いた身でこの青銅サンダルを履き、エトナ山に登りつづけ火口に果てる。後に火山灰のこびりついたサンダルが発見され、飛び込む前に脱いだか、噴火でふきあげられたものか、どちらかによって世界の意味が変わると騒ぎ立てられたという。彼は世界の変化は愛と憎しみによってもたらされると説いた哲人だった。

272 浅沓は、木にて作るなり。但し足の甲の下二ツして合する。漆にて黒くかたくぬるなり。深沓は、靴カという沓の事なり。

しきれとは、「尻切」と書く。革にて作りたるはき物なり。道のしめり有る時はく物なり。今の世の雪踏という物は、しきれをまねたる物なり。

げげと云うは、わら草履の事なり。

伊勢貞丈

★『貞丈雑記 (島田勇雄校注)』から。貞丈は伊勢流武家故実家。宝暦十三(一七六三)年から天明四(一七八四)年にかけて書かれた。図版入り服飾史の古典。今あるものを後世に伝えるというのはやさしいことのように書いて案外難しい。文字にして初めてこの世に存在したことの分かるものがある。実物があってもそれが何に用

いられたものであるか、「銅鐸」など今もって定説の確立しないものもあることを思うと貴重な著作である。

273 婦人の靴は、先のひどく尖った有名なハイヒールだった。この靴は絹やリネルの布地製で、気分や趣味に応じて豊かな刺繍で飾られていた。短いフープスカートがそれをいっそう効果的にした。女性はめったに外出しなかったので、革靴はなかった。・・・婦人たちは長い籐のステッキを持って、それで少々「運動」するようになった。八〇年代に婦人も平らかなかとの紳士靴をはくようになったが、九〇年代にはこれは全くかかとのない平らなサンダルに変わった。

マックス・フォン・ベーン

★『モードの生活文化史（永野藤夫他訳）』から。十八世紀まで上流階級の女性は革靴を履かなかったという史実に虚を突かれる。靴にはリボンや宝石などの装飾品が付けられ、彼女たちは「よろめきながら」歩く始末、医師の勧める運動不足に起因する病氣予防のウォーキングで、ステッキで身を支える姿が痛々しい。男女を問わず全ての人に用いられる歩行の道具としての革靴の歴史は案外新しいものであることが分かる。

274 職人曰く「絵じゃわからん。現物だせ、現物。」とくる。

「おまえらなあ、絵じゃ分らんじゃなく分かる様に努力せーよ」と絶叫する。心の中でね。一応上司だからガマンする。私が描く絵はそんなにヒドイものじゃない。デザイナー同志では意志疎通を図るのには十分すぎるくらいのスケッチ画である。

葉月真琴

★『スポーツシューズの秘密』から。シューズデザイナーというのは平面にスケッチした画では相手にされない。「ここの部分はどやって縫うんじゃ？これで作れると思っとるんか！」と葉月もやられたという。一見靴にならないようなスケッチ画を描く有名デザイナーを、早く何人かチームの一員として抱えるようになった会社が、世界

に伍していける会社だと私は信じています。

275 シューズづくりの現場がどのようなものか知る人は少ないと思うが、じつに地味な作業だ。工程はいくつかに分かれていて、ある工程を担当すると、その作業だけを毎日繰り返すのである。たとえばソールとアッパーを貼り合わせるとしたら、朝から晩まで貼り続けるわけだ。・・・やれ糊がはみだしているだの、貼り付けがずれているだのと、何度もやり直しを命じられたり、叱られてばかりいる日々が続いた。

三村仁司

★『金メダルシューズのつくり方』から。著者は靴づくり三十五年のアシックスの技術マネジャー。私は、ゴミ捨て場にまだ履ける靴が捨てられているのを見たら、持主が亡くなり遺族が、つらさに耐えかねて処分したと考えることにしている。すべての日本人が資源を湯水のごとく浪費するほど高慢ではないと信じたい。お百姓さんのご苦勞を思ったら、米粒一つ粗末にはならない、昔の親は必ず、必ずである、子供にそう教えたことを今の親たちに教える必要がある。

276 随行の人が升田さんの荷物を持ち、升田さんは下駄をぬいで両手にしっかりとつかみ、足袋はだしで、ハカマをひるがえしてホームを駆け、私はそれにつづいた。「とにかくどこでももぐりこんでください」と、随行の人は走りながら指示してくれた。

列車はもう出発間際である。・・・「間に合いました！」と叫ぶかわりに、私は手をあげてVサインを示した。升田さんは両手を高々とかかげて、それをふりまわしながら乗りこんだ。両手には下駄が握られていた。

陳舜臣

★『雨過天青』の「升田さんの下駄」から。升田さんとは将棋の升田幸三である。ダイヤの混乱で混雑する車内で岡山駅から大阪まで升田は下駄に腰を下ろしていたとい

う。何か急な事が勃発したとき、下駄を手
に持つと、それだけで精神は高揚した。そ
して下駄には、人に腰をおろさせてリラ
ックスをもたらす効用もあった。緊張と弛緩
の効用の二つながら持ち合わせるそんな履
物がこの世に存在していたのである。

277 三日目の朝、勢いよく開けた格子戸
の前に、紅鼻緒の、あの古下駄が、キチ
ンと揃えておいてあった。ゾツとして胸
がふるえた。しょげれた紅鼻緒の下駄が、
うらめしそうに私を睨んでいるように見
えた。……

その日和を、そっとつまんで、ゴミた
めの下のほうへ、押しこんでしまった。
私が、恋におくでの娘になったのは、きっ
とあの下駄のせいだと、いまも思ってい
る。 沢村貞子

★『私の浅草』から。小さいときから、家
中の下駄を洗う役目だったが、十五歳のあ
る日、夕方干した下駄を取り込もうとした
ところ、自分の日和下駄だけがなくなっ
ていた。翌日、あなたの紅鼻緒の下駄を持
って、上野公園の五重塔の下でお待ちして
いますという白の封筒が戸に差し込まれて
いたのだという。

278 品川房二は雨あがりの道を東京に
帰った。靴が汚れた。今夜、医学博士・
品川房二は、その靴を磨くだろう。彼は、
靴だけはいまだに一度も他人に磨かせた
ことがない。家族の靴も自分で磨く。

昔、彼はそれで生きた。

いま、それは、彼の人生を塗りこめた
余技となっている。

児玉隆也

★『この三十年の日本人』の「鐘の鳴る丘」
から。博士は“トンガリ帽子の時計台”で
有名な戦災孤児の福祉施設の第一期入所生
だった。後に東大内科の医師になった彼は
“シューシャインボーイ”の精神を忘れな
いのである。私の知り合いに鉄工場の小僧
から大きな鋼材会社の社長になった人が
いて、雨が降ると工場の敷地を見回るのを
常としていた。土の中から現れる鉄屑を拾い

集めるためである。私が詩、俳句、短歌、
小説の中に現れる履物を探し続けるのも、
靴とともに暮らした“初心”を忘れたくな
いからである。

